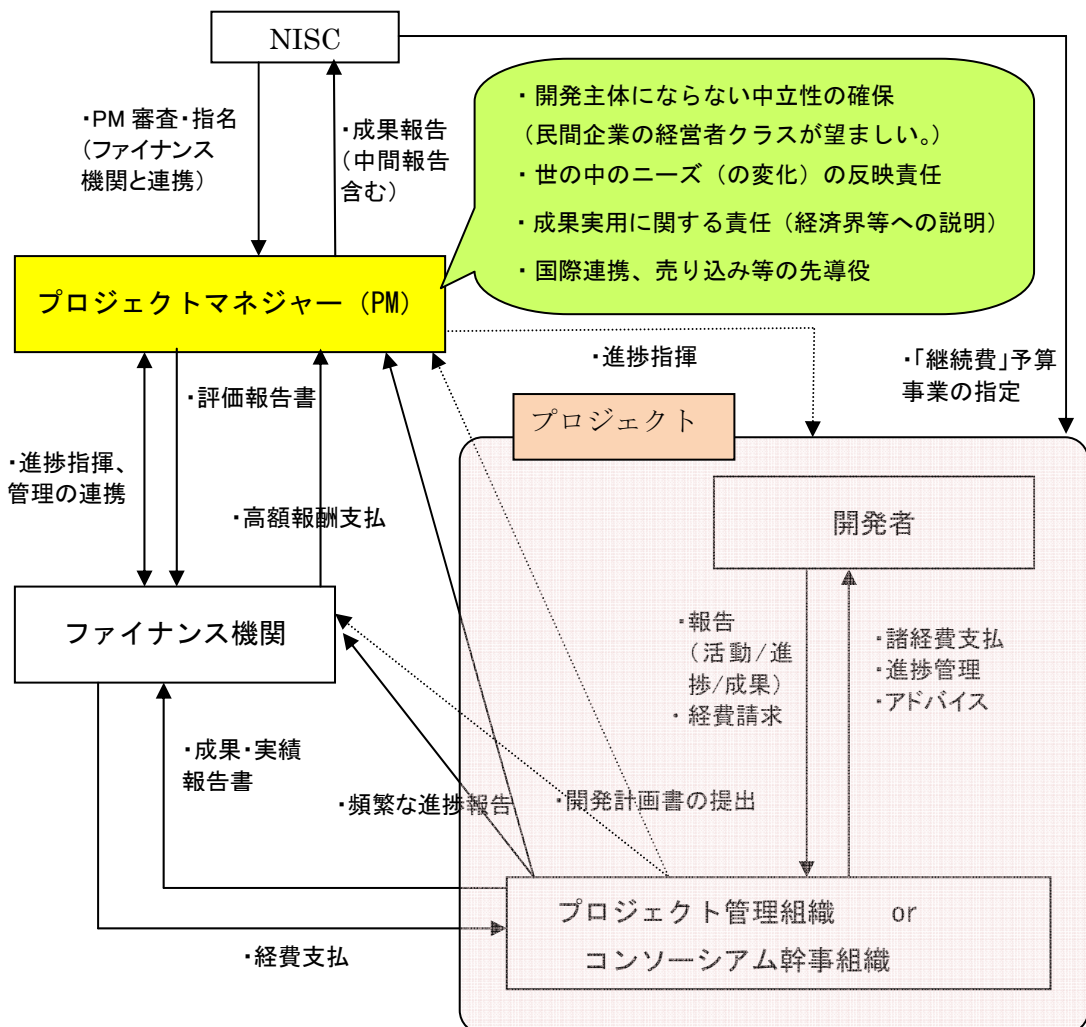


プロジェクト管理に関する委員ご意見

山田委員

現状の問題・課題	複数の組織がコンソーシアムを組んで実施するプロジェクトの中には、実質的に個々の組織の研究を優先させ、全体の成果のメカニズムが働かず、コンソーシアムが当初設定した成果や目標の達成に至らないケースが見られる。
理由	コンソーシアム構成の理由が自組織の既存事業の延長という場合がある。取り纏め幹事組織も自分のテーマに専念。結果、各組織の研究成果をまとめられずに、表面的な繕いや取り纏めに終始してしまいがち。成果活用などの最終出口を強力に志向するメカニズムがない。
改善案	<ul style="list-style-type: none"> ・大統領的な権限を持ったプロジェクトマネジャー制度を導入 ・NISCにより「継続費」の指定等、単年度主義弊害を排除するメカニズムの導入
備考	

新たなスキーム案



プロジェクト管理に関する委員ご意見

西本委員

<p>現状の問題・課題</p>	<p>請負形式（成果物への約束）で実施できるものは枯れた技術・施工のものに原則は限られる。研究開発で同じ評価方法を使用するのは、本来の「研究開発」にならずに、「アリバイ的」成果物を作成することに費やされ、結果、無駄遣いになってしまう危険性がある。</p>
<p>理由</p>	<p>生産性ではなく付加価値を求めるものに対しては別の形式で評価を行う必要がある。また、研究開発は基本的に生産性ではなく付加価値で決まるものだ。</p>
<p>改善案</p>	<p>想定する仮説の妥当性と推進方法を評価し、仮説修正（価値と難易度）並びに場合によっては中断への決定プロセスを明確にし、想定しておく。逆に、数年にわたり仮説が修正されていないものこそ、重要な問題をはらんでいる危険性がある、という認識も重要に思う。</p> <p>当然、評価方法は規模などによりレベルがあってよいと思う。</p>
<p>備考</p>	<p>各分野で先進的に取り組む仮説の妥当性評価を行うことが出来る人間は、現実には推進する本人以外にいないかもしれない。本来、こういう分野にこそ、チャレンジを行う必要があると思うので、良い解決策を見つけてほしい。</p>